

山澄 元著 近世村落の歴史地理：柳原書店、
1982年、A 5判 313頁

著者山澄元氏は1976年、奈良女子大学に在職中、44歳の若さで不帰の客となられた。前途これからという時に世を去られた氏を惜しみ、謹んで御冥福を祈る次第である。本書は七回忌を迎えて奈良女子大学地理学教室のスタッフを中心とする方々の御尽力によって遺稿論文集として刊行されたものである。本書が広く読まれるとともに、学恩をうけた後進の研究者による新しい研究の蓄積を期待したい。

近時における歴史地理学の新しい進みの中において、氏は近世村落にかかわる歴史的領域に主題をもとめ、ユニークな方法論によって研究を進めてきた。氏は歴史的領域に関する研究を「歴史地理学の研究対象となる種々の事象をある政治的ないし行政的な地域との関連において位置づけようとする研究」であると、地域論との接点において多面的に近世村落がとらえられることになった。近世村落の研究は、村落共同体をめぐる論議と個別の事例研究の蓄積とが、結実にむかって必ずしも一つの方向をたどっているともみえない。こうしたところに登場してきたのが歴史的領域の概念である。村落を社会的結合の単位である村落共同体の内部構造、制度的単位である藩政村をはじめとする行政村の支配構造、地域的単位である集落の形態の相互の関連、さらにそのひろがりの中にその本質をもとめ、これをときほぐしつつ地域的特性を明らかにしようとするところに研究のモメントがあった。

本書は全8章からなる。すなわち第1章近世・明治初期における歴史的領域—藩政村から明治行政村へ—、第2章近世の「郷」の歴史地理学的考察、第3章幕末・明治前期の村落規模、第4章畿内における旗本知行地の分布と性格、第5章畿内における郷と藩政村—泉州美木多谷を例として—、第6章毛利藩藩政村の一考察—知行制と共同体—、第7章毛利藩藩政村における知行地の構造—当島宰判紫福村を例として—、第8章旗本領と近世の郷莊—遠州井伊谷・気賀地方を例として—である。以下、藩政村の規模、藩政村をめぐる知行制、藩政村の地域的ひろがりとしての近世の郷の三つのテーマに要約して若干の所見を述べてみたい。

藩政村の規模に関しては第3章がそれにあたり、

これによって氏は近世村落の研究に第一歩をふみだした。村落規模が地域または藩ごとに差異のあることはすでにいわれてきたところである。氏は近世末の状態を継承、記載されているとみなされる『日本地誌提要』に若干の独自の操作を行って、国別の村落規模に地域性のあることを指摘した。すなわち薩摩・大隅では『慶応四年樋脇郷戸口調』、安芸・備後では『芸藩通志』、周防・長門では『防長風土注進案』、肥後では『肥後国志』、讃岐では『西讃府志』をそれぞれ検討して、西南日本では藩政村＝自然村＝大字と公式づけることの誤りを明らかにした。いっぽう近畿を含む以東では、一藩政村70戸ないし100戸程度が標準で、一藩政村＝一集落の構成をとる場合が多く、ここでは中世的村支配を断ち切って近世的村支配が貫徹しやすかったこと、とくに東北では中世的伝統の著しい欠如が小藩政村を成立させた一因とも考えられるとした。その結果、全国的にかなりの普遍性をもついわゆる自然村的集落と藩政村との関係については、村落体制の形成を前提として各地の地域性と対応しながらさまざまなタイプがみられることを示唆した。このことはまだ解明できない問題も多く、今後さらに多くの地域研究の蓄積をまつ必要がある。

藩政村の知行制に関しては第4、6、7章がそれにあたる。このことについて前提になるのは幕藩体制の地域に対する適用、中世的性格がどのように継承されてきたかである。第4章では摂河泉、大和、和泉を検討した上、畿内型旗本とも呼ぶことのできるグループを設定することが可能であるとし、知行地の本拠を畿内におき、織豊の旧臣である外様の旗本が多い点を指摘している。この研究は陣屋の位置と支配構造、旗本領の相給関係へと発展することが、今後期待される。第6章、第7章はともに毛利藩についての研究で西村陸男編『藩領の歴史地理』としてまとめられた共同研究の中にも一部、含まれている。中世的郷の伝統をもつ周防、長門の毛利藩ではもともと村落構成がきわめて複雑である上に、地方知行制がからんでくるため藩領全域にわたって一貫性に欠け、解明をいっそうむづかしくしている。地方知行については矢守一彦の「彦根藩における地方知行について—大名領国の歴史地理的研究—目論見のうち—」（人文地理9、6）に、歴史地理分

野の研究が始まり、氏によってこれがうけつがれてきた。

近世の郷と藩政村に関しては第2章、第5章、第8章がそれにあたる。藩政村を単位とする地域的ひろがりにもとめたフレームワークとしての歴史的領域に郷がある。郷の意味するところは多様で古代郷、中世郷、それを継承した近世の郷があり、さらに宮郷を中心としての山郷、水郷、墓郷、中世豪族の勢力圏としての郷などの相互の累積にも及んで把握する必要がある。それらがどのように変化しながら残存するか、氏は薩摩・大隅、土佐、周防・長門、讃岐、紀伊に事例をもとめた。とくに第8章は前述した三つのテーマを結合させた事例研究で、浜名湖北方の井伊谷、気賀地方の旗本近藤氏五家（金指、気賀、大谷、井伊谷、花岡）の知行地と郷荘との関係に対して鋭い分析を加えた。この章（論文）によってこれを端緒として将来、集大成に向けて研究を進めようとした氏の意欲を感じとることができる。不幸にしてそれは遂に果たされなかったが、今にして思えば氏の旺盛な学問への情熱を燃焼させての結実であったといえるであろう。（野崎清孝）

前田正名著 平城の歴史地理学的研究：風間書房、1979年、A 5判553頁

中国およびその周辺に関して「歴史地理研究」と銘打った著作は、小川琢治『支那歴史地理研究』正統（1928年）を嚆矢として、戦後比較的多く刊行された。例えば、松田壽男『古代天山の歴史地理学的研究』（1956年）、前田正名『河西の歴史地理学的研究』（1964年）、日比野丈夫『中国歴史地理研究』（1977年）、佐藤長『チベット歴史地理研究』（1978年）などがあげられる。しかし、これらの著作の著者は、小川先生を除くといずれも東洋史学の碩学であり、残念ながら地理学者ではない。本書の著者、前田正名氏も現在駒沢大学文学部東洋史学科の教授で、長年にわたり中国西北辺・北辺を対象地域として、東洋史学の立場から歴史地理学的研究に従事されてきた。本書は氏が昭和42年4月から昭和52年3月までの10年間、立正大学に在職していた時期の論考をまとめられたものである。はじめに掲げた氏の前著は河西通廊一帯を対象地域とした歴史地理学的研究であり、本書は前著の方法論を基礎として、対象地域を平城・桑乾河上流域においた研究である。

東洋史学の側からの歴史地理学研究ということで、

地理学を業とする者として、正直に言ってかなり違和感を覚えることは否定できない。それは研究の対象は共通していても、その研究の目的・方法あるいは結論が、われわれの歴史地理学のそれとかなり異なっている点にあると思われる。しかし、その点において、われわれが従来見落としてきた、あるいは持ち得ない分析の視角があり、反省させられることが少なくない。以下逐次、内容を紹介していきたい。

本書は以下の内容から構成されている。

- 第1章 北魏時代における桑乾河流域の自然地理
- 第2章 住民構造
- 第3章 平城都市景観の展開
- 第4章 平城をめぐる交通路
- 第5章 平城をめぐる家畜類・畜産品・獣類
- 第6章 平城における交易について
- 第7章 平城と河北平野との経済関係
- 付篇（1） 平城付近・桑乾河流域・隣接地域人口流動一覧表
- 付篇（2） 四～五世紀における太行山脈東麓路
- 付篇（3） 三～五世紀における太行山脈東麓の地域構造に関する論考—住民構造を通じて

はじめに桑乾河は山西省北部の管涔山に源を發し、北東に流れて河北省北西部に至り、永定河と名を変えて南東に流れ、北京市西部を経て天津市に至り、海河に注ぐ。毎年桑の実が熟するころに川の水が濁れると伝えられるところから、この名がある。この河が中部を貫流している盆地が桑乾盆地である。海拔600～1,000mで、山西省の北部から河北省北西部の内・外長城の間にわたる。この地方は中国農耕地帯の北限地帯に近く、歴史上、中原王朝の勢いの盛んな時期には漢人による農耕景観が展開し、北方遊牧民の支配が波及する時期には農耕景観は衰微し、代って牧畜景観が卓越した地方である。漠北遊牧民の勢力が南方の中原地帯に向かって発展してくる時、必ず經由する地方で、その点において中国史上に重要な位置を占めてきたという。また平城は現在の大同市で、鮮卑族の拓跋部が黄河以北の華北平原を征服し建国した北魏帝国の国都である。386年、諸部族に推戴されて魏王となった拓跋珪（太祖）は、都を盛楽に定めたが、398年に国都を平城に遷し皇帝の位についた。これより493年、孝文帝により洛陽への遷都が強行されるまでの約1世紀の間繁栄した。すなわち北魏帝国が胡族の国家から脱皮して、魏晉の伝統を継ぐ中国的な国家へ成熟する過渡期の国都